



水星交響楽団

第62回定期演奏会

指揮 齊藤栄一

2021年11月28日(日) 12:30 開場 13:30 開演

すみだトリフォニーホール 大ホール

水星交響楽団

第 62 回定期演奏会

伊福部 昭

シンフォニア・タプカーラ

(約 35 分)

キース・エマーソン&グレッグ・レイク／吉松 隆：編曲

タルカス

1. 噴火 Eruption
2. ストーンズ・オブ・イヤーズ Stones of Years
3. アイコノクラスト Iconoclast
4. ミサ聖祭 Mass
5. マンティコア Manticore
6. 戦場 Battlefield
7. アクアタルカス Aquatarkus

(約 20 分)

— 休 憩 (約 20 分) —

ドミートリイ・ショスタコーヴィチ

交響曲第 12 番 ニ短調「1917 年」作品 112

- 第 1 楽章 革命のペトログラード Moderato
第 2 楽章 ラズリーフ Adagio
第 3 楽章 アフローラ Allegro
第 4 楽章 人類の夜明け L'istesso tempo

(約 45 分)

新型コロナウイルス感染拡大防止に関するお願い

- ◎発熱、風邪のような症状、体調にご不安がある場合は、ご入場の自粛をお願いいたします。
- ◎入場時に非接触型検温機（熱感知サーモセンサー等）にて体温を計測させていただきます。
平熱より高い熱があるお客さまには入場いただけませんので、予めご了承ください。
- ◎入場時やエントランスでの消毒用アルコールによる手指の消毒、こまめな手洗いに協力をお願いいたします。
- ◎施設内では必ずマスクを着用し、鑑賞中およびロビー、ホワイエでのご休憩時も着用してください。
- ◎場内における会話や終演時のブラボー等の掛け声はお控えください。
- ◎飲食の提供、物販を中止しております。館内での飲食はお控えいただけますようご協力をお願いいたします。
- ◎終演後のホール内および周辺での出演者との面会はできません。
- ◎出演者への花束・プレゼントの受付はいたしません。出演者への直接の受け渡しもお控えください。
- ◎新型コロナウイルス感染拡大防止のために、お客様の氏名・連絡先を、必要に応じて保健所等の公的機関へ提供させていただく場合がございます。

ごあいさつ

本日はお忙しいところ、私ども水星交響楽団（略称：水響）の演奏会にご来場いただき、誠にありがとうございます。

さて、当団の演奏会チラシ（フライヤー）、このパンフレットの表紙のデザインは、デザイナーの水本紗恵子さんをお願いしております。いつも素敵なデザインばかりで毎回感心しているのですが、最終的なデザインがあがってくる前に、いくつかのラフスケッチのようなものをご提示いただけるタイミングがあって、このスケッチを拝見するのが、実は大変に愉しみな作業だったりしています。

水本さんには、デザインをお願いするにあたって、その演奏会の曲目と全体的なコンセプトを説明するのですが、今回は「アレグロの系譜」というなかなか抽象的なテーマでした。「何か尋常ではないものが等速かつ素早く動いている」とか、わかるようなわからないようなお話もしましたが、さすがに今回は無理難題をお願いしてしまったかなと思っていたところ、それを受けてのスケッチが、今回のチラシに描かれている「夜を疾走する巨象」でした。けっこう衝撃的、でも、イメージ的にはまさにピッタリ。改めて水本さんの創造力に感心させられました。筒井康隆さんの傑作短編で「走る取的」という小説がありますが、取的（お相撲さん）に無言のうちに追いつめられるある種の恐怖感。それを彷彿させる素晴らしいデザインと思います。

シンフォニア・タプカーラの群舞や、ショスタコーヴィチ第12番の戦闘シーン、それを遠くで窺うアルマジロ戦車。その反対側には、風神・雷神のごとく、巨象が睨みを効かせている。そんなイメージも浮かんでくるような気がします。ぜひ今一度ご覧になってください。

それでは、ごゆっくりお聴きください。



水星交響楽団 運営委員長 植松 隆治

水星交響楽団

水星交響楽団は、1984年に一橋大学管弦楽団の出身者を中心に結成されたアマチュア・オーケストラである。都内の主要ホール等で、定期演奏会を年2回行い、マーラー、バルトーク、ストラヴィンスキー、プロコフィエフ、ホルストなど大編成の曲に積極的に取り組んでいる。楽団の名前の由来は、一橋大学のシンボルである「マーキュリー」やセロ弾きのゴーシュの「金星音楽団」から来ている等いろいろ考えられる。



第60回定期演奏会
(2019年11月4日)

©Takashi Fujimoto

指揮者紹介

齊藤 栄一



京都大学にて音楽学を、国際基督教大学大学院にて美術史学を研究。この間、指揮法を尾高忠明、田中一嘉、円光寺雅彦の各氏に師事。1981年には京都大学交響楽団と2週間に渡り、ドイツ、オーストリアにて演奏旅行を行い、ザルツブルグ音楽祭などにて指揮。1982年には関西二期会室内オペラ・シリーズ第9回公演、ブリテン作曲「ねじの回転」（関西初演）の副指揮者を務める。

1984年に水星交響楽団の常任指揮者に就任。水星交響楽団、オルフ祝祭合唱団との共催で、佐多達枝振り付けのバレエ「カルミナ・ブラーナ」（1995年、東京文化会館）、「ダフニスとクロエ」（99年、新宿文化センター）を指揮した。その後、「カルミナ・ブラーナ」のバレエ公演では、神奈川フィル、東京シティ・フィルも指揮している。2005年には、同曲を含むオルフの「トリオンフィ」3部作（4台のピアノと打楽器）を指揮している。

明治学院大学文学部芸術学科教授。著書に「往還する視線 14 - 17世紀ヨーロッパ絵画における視線の現象学」（近代文芸社）、「振っても書いてもしょせん酔狂」（水響興満新報社）がある。

楽曲解説

伊福部 昭

シンフォニア・タプカーラ

伊福部昭と「ゴジラ」は良くも悪くも切り離せない。事実、Google検索で「伊福部昭」に関するサジェストで最初に出てくるワードはまさしく「ゴジラ」だ（2021年11月19日現在）。ちなみに、私たち水星交響楽団が公式の場で最初に演奏した伊福部作品も「ゴジラ」などの音楽を再構成した「SF 交響ファンタジー第1番」（1983）だった（2009年、第42回定期演奏会のアンコールにて）。

この、伊福部昭と言えまづもって「ゴジラ」をはじめとした怪獣映画の映画音楽作曲家であって、シリアスな純音楽の分野での業績について語るべきことはほとんどない、というのが1980年代半ばごろまでの日本の音楽界隈ではほぼ共通認識であり、その純音楽の作曲家としての存在はほぼ等閑視されていたといっている。

そのような中、作曲家としての彼の業績を総合的に再評価しようとする伊福部ルネサンスとでも言うべき潮流は、映画音楽の体系的な発掘によるレコード化、弟子である芥川也寸志と彼が監督を務めていたアマチュア・オーケストラ新交響楽団による継続的な紹介などの地道な活動により徐々に形作られていき、喜寿を記念するコンサート（1991）、純音楽作品のセッション録音による全集（1995年に製作開始）等に結実、2000年

代には確固たる地位と熱狂的なファンを獲得するに至っている。

まずは作曲家 伊福部昭がどのような世代に当たるのか整理しておこう。同年生まれの作曲家として目を引くのは小山清茂（学年は小山が一つ上）、早坂文雄（1930年代の札幌にて活動を同じくしている）ら。世代的な共通性として「民族主義的」な作風を挙げることができそうだが（世界的に見ると同年生まれには目立った名前は見られないが、1つ上の1913年生まれにベンジャミン・ブリテン、ヴィトルト・ルトスワフスキらがいる）。近年私たちが演奏した日本人作曲家との関係で言えば、三善晃のおよそ20年、吉松隆のおよそ40年上に当たる。

伊福部昭は大正3年（1914年）北海道釧路幣舞町にて、内務省職員の父利三（この時は警察官）と母キワのもとに3人兄弟の3番目として生まれる。ちなみに伊福部氏は原来、大国主命に起源を持つ因幡国（鳥取県東部）の国造の家系で、明治維新まで当地の一宮である宇部神社の神主を務めていたという名門である。

大正12年（1923年）、9歳の時、父利三が音更村の官選村長に転身したことに伴い、同地に移住した。音更は十勝地方の中心地の一つで、帯広に接する地域である。当地には明治中期に成立したアイヌコタンがあり、ここで昭少年はアイヌの文化に直接触れることになる。



音更時代からヴァイオリン、ギターなどを独習していた昭少年であるが、12歳で札幌二中（旧制中学）入学のために移った札幌で、後に音楽評論家になる三浦淳史、前出の早坂文雄らと出会う。三浦の勧め（そそのかし）もあって独学で作曲を始める。

北海道帝国大学農学部で林業実学を学ぶ一方、大学オーケストラでヴァイオリンを弾き（コンサートマスターを務める）、三浦、早坂らと新音楽同盟を結成して同時代音楽の紹介活動を行う一方で作曲活動も継続。このころラヴェル、更にはストラヴィンスキーに大きな影響を受けた。

1935年大学卒業後、林野局に奉職、北海道厚岸で国有林の管理業務に就く。この年に書いた「日本組曲」を、亡命ロシア人作曲家・指揮者のアレクサンドル・チェレプニンがアジアの作曲家を対象としてパリで開催したチェレプニン賞に応募、結果大賞を受賞した。1937年に短期来日したチェレプニンから直接指導を受け、これが作曲に関して「教えを受けた」唯一の経験となった。

林野局を辞したのち札幌に移り、戦時中は木材に放射線を当てることで材質を強化する研究に携わるが、終戦直後に放射能の影響により体調を崩して長期静養を余儀なくされる。

終戦翌年1946年静養中に知人からの声掛けで映画音楽の作曲をはじめ、この仕事のために栃木県日光久次良町に移住、ほぼ同時に東京音楽学校に講師として招かれる。1953年までの比較的短期間の在職中に芥川也寸志、黛敏郎、松村禎三、石井眞木ら代表とする数々の作曲家を輩出する。また、この期間に執筆された代表的な著作の一つ「管弦楽法」は、一般的な用例などの他、音響学・音響心理学等の知見を取り入れた極めて「科学的」なものであり、自然科学者としての伊福部の素養の高さを物語るものである。

東京音楽学校を辞した後は映画音楽を主たる活動の場としながら長くフリーで活動していたが、年齢60にして東京音楽大学作曲家教授に就任、翌々年からは学長を務めた。東京音大での教え子には映像の分野での活躍が目覚ましい和田薫らがいる。また、1985年には付属民族音楽研究所の所長となったが、ここには自身のライフワークの一つでもある世界各地の民俗楽器の蒐集の成果がコレクションとして遺されている。

その後も90歳を超えるまで旺盛な活動をつづけたが、2006年病没。享年91歳。

さて、伊福部が東京音楽学校の講師を辞した翌年、一つの映画が公開されセンセーションを巻き起こした。それこそまさに東宝の特撮怪獣映画「ゴジラ」（1954）である。その音楽のインパクトも非常に大きく、良くも悪くも伊福部の代表作として挙がるのは必然であると納得させられるものがある。

と、ほぼ同時期に作曲された純音楽作品が、今回演奏する「シンフォニア・タブカーラ」なのである。伊福部が「シンフォニア＝交響曲」と題される作品を書くのは

これが初めてだったが、伊福部は若い頃から交響曲を書くことに意欲を示しており、「日本組曲」、「交響譚詩」（1943）なども当初は交響曲として構想されたとされる。しかし、直接指導を受けたチェレプニンに時期尚早であると釘を刺されたこともあり、最終的に「交響曲」に到達するのに自身が40歳に到達するまでの時間を要したことになる。

アイヌ語由来のタイトル「タブカーラ」に示されるように、子供のことに触れたアイヌの文化への郷愁が基礎となっているこの作品は、「作曲」を志すきっかけとなった人物、三浦淳史に捧げられている。1954年に作曲され翌年アメリカにて世界初演、1956年には日本初演が行われた。世界初演の録音に不満を覚えていた伊福部だったが、日本初演の際に評論家の大多数から酷評を受けたことも重なり、結果お蔵入りとしてしまった。

そのような中、伊福部の弟子でもある芥川也寸志が音楽監督を務めていた新交響楽団で展開していたシリーズ「日本の交響作品展」の伊福部特集のために1979年に改訂が行われ、翌1980年に初演された。今聴くことができるのはこの改訂版である。

「タブカーラ」とは、伊福部曰く、酒宴などの場で興が乗った人が即興的に立ち上がって歌い踊るような様を含意すること。この説明が微妙くも指し示すように、この曲は古典的な交響曲に求められるような堅固な構成よりも、即興的な場面の転換に焦点を当てるように形作られている、という印象を与える。

全曲は急・緩・急の3つの楽章から成るが、それぞれの楽章もシンプルな3部形式に準じて書かれている。

第1楽章は最もソナタ形式に近い形で書かれている。短い序奏でチェロとファゴットによって提示される主題がこの楽章の主要主題である。テンポを上げた主部ではこの主題が変拍子を伴った熱狂的な舞曲へと発展していく。これが第1主題だとすると、弱音器付きのトランペットに現れるなだらかに弧を描くようなメロディーが第2主題。テンポを落として序奏のフレーズが強奏されると、そこからはソナタ形式で展開部に相当する中間部。ここでは主に第2主題に基づいて儀式めいた厳かな音楽が奏でられる。ホルンとチェロによるカデンツァ風のソロ、ファゴットによるブリッジを経て主部が圧縮された形で再現されると、そのままの勢いで一気に楽章の終わりまで駆け抜ける。

第2楽章は緩徐楽章。最初ハーブに現れる6音単位（拍子の変化で頻りに数は変わる）の下降音形が全曲を通じて繰り返される上で、フルートが歌い出す息の長い旋律が楽器を変えながら纏綿と歌われる。ラヴェルの「スペイン狂詩曲」の第1曲を想起させる「夜の音楽」である。中間部もこの「夜の音楽」の延長だが、第1楽章の中間部とは逆に若干テンポを上げ、プラルトリラのコブシの効いた3度下



降音形を軸に、やや激した身振りを見せる。主部の最初の一くさりをほぼそのまま再現した後、中間部の3度下降音形を物悲しげに4回呟いて曲を閉じる。

第3楽章は伊福部曰く、もっとも「アイヌらしさ」を直接的に取り入れた音楽であり、伊福部らしさを最も色濃く刻印された音楽でもある。一般的な西洋音楽とは異なり最終拍にアクセントが置かれるリズム、フリギア調による鄙びたメロディー、狭い範囲でぶつかり合う不協和音中心の音響構成(冒頭の和音はNHKの緊急地震速報の素になっている)など、全般に粗野な印象を与える音楽である。若干テンポを落とした中間部では、最初オーボエに現れるおどけた調子のメロディーがカノン風(拡大カノンを含む)に扱われる。そこに重なるお囃子風のメロディー(ピッコロの存在感!)は、再帰した主部においてホルンとトロンボーンにより強奏され、熱狂のうちに全曲を閉じる。

(櫻井 統)

キース・エマーソン&グレッグ・レイク/吉松 隆:編曲 タルカス

みなさまご存じプログレッシヴ・ロックの傑作ですね。70年代の伝説的ロックバンド Emerson, Lake & Palmer 略して EL&P が、1971年に発表したセカンドアルバムが「タルカス」です。全英1位を獲得したこの記念碑的アルバムに収録されているのがロックの常識を覆した20分を超える大曲「タルカス」でございます。本日はその20分超えの大曲「タルカス」を日本が誇るオーケストラ作曲家 吉松隆さんが2010年にフルオーケストラに編曲したものを演奏いたします。

さてプログレッシヴ・ロックとはなんなのでしょう。業界では「プログレ」と略され、クラシック界では作曲家の吉松隆さんやモルゴア・カルテットの荒井英治さんなどプログレマニアを公言する方々を輩出してきたロックの一大分野ということなのですが定義としてはあまりはっきりしません。

いわゆるロックというなかに、技や変拍子やストーリーやクラシックやジャズなどなどなど!ロックという一言ではくくりきれない何かが盛り込まれたものがプログレッシヴ(前衛的、革新的)という冠をつけて呼ばれたのだと私の買ったベスト盤には書かれておりました。一世を風靡したのは60年代末から70年代初頭、そしてEL&Pはそれらを代表するスーパーグループ。残念ながら65年生まれの筆者はプログレの洗礼を直接受けることはできませんでした。

ということで私と「タルカス」との出会いは本日お送りする吉松隆さん編曲のオーケストラ版です。打楽器奏者を熱狂させる白熱した変拍子のBeatに魅せられ、EL&Pのオリジナル盤にさかのぼっていききました。

吉松隆さんの編成は3管+多種の打楽器にピアノというゴージャスなフルオーケストラですが、EL&Pはなんと3人でやっております。Beat感やアドリブの自由さ加減は圧倒的にオリジナル盤ですね。音の隙間という隙間に刻みを埋め込んだ、とにかく音数の多い超絶プレイにのけぞります。さらに特筆すべきは音色の多彩さです。キーボード担当のキース・エマーソンが多種のキーボードを駆使し、ドラムスのカール・パーマーはドラムスからティンパニ、ドラなど並べ、グレッグ・レイクはヴォーカルからベース、ギターまでといった具合で本当に多彩な音色が聴かれます。シンセサイザ黎明期によくぞこれだけの音色を詰め込んだものですね!

さて水響勢にとって永遠のスター、レナード・バーンスタインはクラシック音楽とポピュラー音楽の違いについて、「音楽の書法の違い」なのだと言っています。すこし引用しますと「どんなポピュラーソングでも、そのメロディーから離れてしまうことなく、何千通りものやり方で歌ったり演奏したりできます。反対にベートーヴェンの音楽は、一定のやり方で、しかもそのやり方でだけ演奏されねばならないのです。」ふむ!確かに吉松隆さんのタルカス編曲はオリジナル盤の自由さ加減に対してググっと楽譜に忠実な演奏が求められるクラシックな書法で書かれており、かなり整理されております。

オリジナル盤の魅力でもある埋め尽くし感は少し薄れますが、それに代わる強力な魅力として電気楽器のない美しい音色とフルオーケストラのダイナミクスが溢れます!吉松隆さんはこれをなんとCDからの耳コピで書かれたとのことでございます。オリジナル盤に忠実なりミックス作品という言葉が使われていますが、私的には吉松隆さんのオリジナル作品、朱鷺に捧げる哀歌、大河ドラマ「平清盛」のテーマ、交響曲第5番などに連なる吉松隆さんの作品という印象です。

そういえばEL&Pもクラシック曲をポピュラーの書法に移し替えた自由奔放なりミックスをたくさん録音しています。バッハ、ヤナーチェク、コープランド、バルトーク、ムソルグスキー、チャイコフスキー、ヒナステラ、プロコフィエフ、ロドリゴ...イギリス出身の3人が集まったEL&Pにもやはりバックボーンには教会の讃美歌とクラシック音楽があるのかなと感じます。ぜひご一聴くださいませ。

そういった魅力満載の「タルカス」でございます。ちなみに「タルカス」というのはキース・エマーソンが閃いた想像上の怪物だそうです。火山の中から現れ、地上のすべてを破壊し尽くし、マンティコアと戦い、海に帰っていくとのこと!すごいですねえ。あのジャケットは強烈ですよ。映画化してほしいものです。





EL&P オリジナル版のレコードジャケットデザインの T シャツで気合を入れて合奏に臨む植松委員長

曲は7つの部分からなり、オリジナル盤と同様に続けて演奏されます。

1. 噴火 Eruption

不穏な和音が遠くから聴こえてきたかと思うと一転して Allegro Molto の 5/4 拍子！ノンストップアクションが始まります。ここが噴火なのでしょう！タルカスも誕生したのでしょうか！火山から誕生した怪物と言えば「空の大怪獣ラドン」でございしますが、こちらは地を這うキャタピラを持つアルマジロ！そういえばウルトラセブンを苦しめた恐竜戦車と近い生き物なのかもしれません。ウルトラセブンの放映が 1967 年ということ。キース・エマーソンも影響を受けていたということございましょう。度肝を抜く噴火は変拍子の嵐のなかでなんと 2 分半程度で終わってしまいます。

2. ストーンズ・オブ・イヤーズ Stones Of Years

曲は一転してピアノが奏でるバラード、オリジナル盤ではグレッグ・レイクがロックバラードを歌い上げ、キース・エマーソンがハモンドオルガンでブルース調のアドリブを延々繰り返します。本日のフルオケ版ではホルンとトランペットのソロが聴きものでございましょう。生まれたばかりのタルカスはなにを考えたのでしょうか？

3. アイコノクラスト Iconoclast

そして再び Allegro Molto の 5/4 拍子！アイコノクラストは偶像破壊と訳され、タルカスの破壊を描いているとのことです。そう、破壊はいつも 5/4 拍子なのです！オリジナル盤ではこれでもかという刻みで埋め尽くされていますが、本日のオケ版は変拍子に乗ったコラール風ファンファーレが実にかっこよく現れます。怒涛の破壊は 1 分半でミサに続きます。ショスタコービッチの交響曲第 10 番第 2 楽章を思い起こすのは私だけでしょうか...

4. ミサ聖祭 Mass

ようやく来た 8 beat！4/4 拍子です。いわゆるロックビートの本流がようやく出てまいります。オリジナル盤ではエレキギターのリフに続いてグレッグ・レイクのシャウトに続き、カール・パーマーのドラムソロが暴れまわります。なんというミサでしょうか？本日はトランペットがビシッと決めてくれることございましょう。

5. マンティコア Manticore

ミサから突如 9/8 拍子に一転、シャッフルとあってよいのかな～3/4 拍子と交錯してまいります。やはり Allegro Molto です！ついに敵役マンティコアの登場です。ライオンの胴とサソリの尾をもった怪物とのことです！キャタピラを持つアルマジロとの戦いはどんな様子だったのでしょうか？力尽きていくようなトムトムのソロにつづいてコラール風の下降音型が始まるとそこはもう戦場です。

6. 戦場 Battlefield

荒涼とした戦いの後なのでしょう。もはや戦いの音楽という雰囲気ではございませぬ。アレキサンドルネフスキーの氷上の戦いが終わった後のようです。すべてが壊れてしまったような物寂しい歌と、なにかが再び歩き出すようなマーチ風のフレーズが交互に現れます。

7. アクアタルカス Aquatarkus

マリンバとピアノがマーチ風のフレーズをつぶやくようにリフレインすると、小太鼓のリズムに乗り本格的にマーチ始動です。これがタルカスの復活なのか？勝利なのか？オリジナル盤では同じメロディーと伴奏にのって延々とキース・エマーソンのアドリブソロが繰り返されます。オケ版ではボレロ風にひたすら盛り上がりまいります。この辺りはオケならではの響きを満喫いただける箇所かと存じます。やがて響きが遠ざかっていくかと思いきやドラが鳴り響きます！そして冒頭の「噴火」で聴かれたテーマが帰ってまいります！今度の速度記号はなんと「Allegro Molto！」と書かれています。そう考えるとここで鳴り響く中低音の長いフレーズがタルカスのテーマなのかもしれませんね。傷ついたタルカスは海に帰っていくとの解説もありますが、生まれたのは火山だそうですから帰ったというのもどうなのでしょう？

印象的にはマーチが遠ざかったあたりでタルカスは去ってしまい、「Allegro Molto！」以降はエンドタイトルのようにも感じます。冒頭に輪をかけたノンストップアクションの末には Maestoso のコーダです。フルオケの必死の叫びを聴いてやってください。ああタルカスよ、どこに行くのか？



本日のコンサートのテーマはずばり「アレグロ」イタリア語で Allegro とつづるテンポを表す音楽用語です。その意味するところは「早く、快活に」などと音楽辞典には書いてありますが、交響曲作家におけるアレグロというのはやはりベートーヴェンの運命の第1楽章に象徴される早いテンポとゆるぎのないがっちりした曲想ではないかと思われまます。

ベートーヴェンが確立した交響曲的 Allegro は、時を超え、海を越え、ショスタコービッチの Allegro 楽章の傑作第12番や、変拍子による緊張感を核とした春の祭典、私の Allegro は決して早すぎてはいけなとおっしゃったシンフォニア・タプカーラ、そして Beat そのものを中心に据えたロックと結びつき、ついに吉松隆版タルカスにまでたどりついたのではないかと思うのです。お楽しみくださいませ。並みのオケ曲ではございません…

(山本 勲)

ドミートリイ・ショスタコーヴィチ 交響曲第12番 二短調「1917年」

ドミートリイ・ドミートリエヴィチ・ショスタコーヴィチ(1906-1975)の幼少時代のエピソードは乏しいが、8才の時にリムスキー・コルサコフのオペラを聴き音楽を勉強したいと真剣な眼差しで宣言したと思えば、瞬間に才能を開花させ13才で「モーツァルトと同水準である」との評価を受けペテルブルグ音楽院に入学した神童ぶりであった。

作曲家の他にピアニストとしての顔を持ち、第1回のショパンコンクールにもロシア代表として出場した腕前であった。レニングラード音楽院の講師も勤めており、「革命」交響曲発表の興奮に沸いた次の日も何事もなかったかのように教壇に現れ授業をおこなったとのエピソードも残されている。またサッカーを愛好しており審判資格を保有、地元クラブのスコアを頻繁にメモしていた。作風においては、親しみやすいリアリズムの音楽から前衛的な音楽、硬質で暗く重厚な交響曲や弦楽四重奏から、ジャズ風の組曲、映画音楽など、宗教音楽以外のあらゆるジャンルに多くの作品を残している。

ショスタコーヴィチによって書かれた楽譜は(ベートーヴェンの楽譜が何度も修正されて書き直されているのに対し)、書き直しが少なく印刷のように几帳面。頭の中に完成された音楽を楽譜に書き写すタイプだったようで、作曲の際にピアノを弾いてみる必要はなかった。よってショスタコーヴィチ自身がピアノに向かって作曲しているところを見たものはいない。しかし彼は頭の中で相当の反芻をしながら曲を組立て、その上で譜面上にアウトプットしていたようで、時々「作曲のための家出」をすることもあった。作曲家仲

間のミハイル・メエロヴィチが観察したところによれば、「ショスタコーヴィチは、サッカーをしたり、友人と一緒にブラブラしていたかと思うと、急に姿を消した。そして40分かそこらするとまた現れて、『調子はどうだい？ 僕にボールを蹴らせてくれ』などと言った。その後みんなで夕飯を食べて、ワインを飲んで散歩をする。ショスタコーヴィチは座を盛り上げる人気者だ。しかしときどきふっと姿を消して、しばらくするとまた戻ってくる。私の滞りも終わりに近づいた頃、ショスタコーヴィチは、完全に姿を消し、一週間戻ってこなかった。そして次に現れたときには、ひげぼうぼうで、疲れ切った感じだった」(※)。ショスタコーヴィチの音楽に対する並外れた集中力を物語るエピソードである。

※「天才たちの日課」(メイソン・カーリー著)より
そのまま引用

作品は多面的であるということがトレードマークとなっているが、この特徴は当時の社会情勢の影響を無くして語ることはできない。スターリンが行った思想統制により、自身が考える表現を自由に発表することができなかつたのである。最初は前衛的な作曲家として活躍していたが、革新的オペラ「ムツェンスク郡のマクベス夫人」の発表がソビエト共産党の機関紙「プラウダ」によって批判を受け(プラウダ批判)、作風を変えざるを得なくなり、交響曲第4番の初演も中止となる。その後、社会主義に迎合した作品に路線を変更し、交響曲第5番「革命」で共産党からの名誉を一旦回復する。その後さらに前衛芸術を取り締まる「ジダーノフ批判」にソビエト国内のほとんどの作曲家がさらされ、作曲家として最も影響力のあったショスタコーヴィチは批判の対象の中心であり、ついには自身もソビエト共産党員にさせられてしまう。スターリンの死後、思想統制が緩和され、自由な風が吹き始めると、ショスタコーヴィチの作風も再度前衛的な風味が戻っていることも見て取れる。

さて、この社会主義(共産党賛美)に迎合した音楽(今回の交響曲第12番もその傾向に属する)に対して、ショスタコーヴィチ自身がどのように思っていたかどうかは判断の分かれるところであり、聴く者によって様々な解釈があり得る。始めはレーニンの十月革命の成功を賛美する交響曲を書く計画すらした背景からは肯定的な思いも読み取れるし、一方で、レーニンの後継のスターリンによる思想統制と弾圧によって死の恐怖に脅かされることになる事からは、否定的な印象を持っていたと推測せざるを得ない。今回演奏される交響曲第12番に対しては「レーニンへの賛歌」として作曲の意欲を見せていたが、一方交響曲第5番「革命」の終楽章に関しては「強制された歓喜である」とショスタコーヴィチ自身が後に発言したとか。1961年に共産党に入党させられた時には家族の前で「党員にさせられ



てしまったよ」と泣き出したエピソードも息子によって語られているし、しかし逆に、ショスタコーヴィチ自身社会主義的な音楽の発表によってかなりの地位と、経済的安定を手にはしている事は間違いがない（毎年の演奏旅行も確約されていた）。

このような複雑というよりアンビバレンツな事情の中で自身の作風を変化させていったショスタコーヴィチは、過去に作曲した自分のメロディーや他の作曲家のメロディーの引用を多用する作風ともあいまって、彼の否定派からは「トランス状態のやつつけ仕事屋」と言われることもあった。

ショスタコーヴィチ音楽の社会主義はショスタコーヴィチ自身の音楽の理想を捻じ曲げたものであり、生活や生き抜くためにそうせざるを得なかったのか。また「音楽は音楽だし」とある意味楽観的に使い分けしていたのか。はたまたそれら全てを昇華させた上で一個の時代的音楽として提出したのか。これ以上この作曲家の史実が発見されない限りは、聴く者それぞれが音楽から推察することしか方法は残されていないと言える。

しかし、どんな解釈が存在するにしても、ショスタコーヴィチの音楽が現在も我々を魅了していることは確かで、マーラー以後の20世紀の作曲家においてこれほどの数演奏されている交響曲はショスタコーヴィチ以外にはないのである。

交響曲第12番「1917年」

ショスタコーヴィチは15曲の交響曲を作曲している。

27もの旋律を同時に組み合わせた「ウルトラ対位法」と呼ばれる技法を駆使した第2番、前述した最も有名な第5番「革命」（第4楽章はソチ五輪の聖火点灯の直前のBGMとして使われていた）、ラヴェルのポレロの構成を彷彿とさせる第7番「レニングラード」などと比べて、今回演奏する第12番は知名度こそ低いものの、旋律や和音、音響効果のわかりやすさにおいて、親しみやすい作品であり、ショスタコーヴィチの交響曲の導入としても聴きやすい。また演奏会にも滅多に取り上げられない曲であるため、生演奏に接する機会も少なく貴重である。

1917年とは、レーニンによって行われた十月革命（ロシア革命）のことを指す。全音楽譜出版社のスコア解説による十月革命の説明がわかりやすいので引用しておく。「1917年4月に亡命先のスイスから帰国したレーニンはペトログラード（今のレニングラード）で「4月テーゼ」を発表、国家権力をソビエト（労働者、兵士、農民会議）に移すよう主張する。この頃、レーニンは、ペトログラードの近郊のラズリーフで、ひそかに革命の構想を練る。レーニンの要請で蜂起を準備していたボリシェビキは10月24日軍艦アフローラの号砲を合図に行動を起こし、翌朝首都を占拠、26日までに各宮殿や各官庁を占領する。こうして革命は無血のうち勝利する。第2回ロシア・ソビエト大会は権力の掌握を宣言して、ロシア・ソビエト連邦共和国が誕生、

レーニンを首班とする人民委員会議員を選出、ソビエト政府が樹立される。」

この交響曲第12番は1930年代に「レーニン交響曲」として着想された交響曲がもととなっているが、時を隔て、アイデアも大幅に変化して1961年に完成されている。その年の共産党大会に発表され、ムラヴィンスキーの演奏が録音されており現在でも聴くことができる。音楽界・政界の評価（この曲は何の賞も受けることはなかった）に比べて、労働者、坑夫、学生、農夫たちには熱狂的に迎えられ、演奏された。

第1楽章 革命のペトログラード Moderato

戦争の連敗や経済の崩壊により国民の生活は困窮し、ロシア革命が起こる中、二月革命でロシア帝国が終焉し、ロシアは貴族や富豪による「臨時政府」と労働者会議による「ソビエト」による二重権力の状態となる。ペトログラードに到着した革命家レーニンは臨時政府を激しく批判しソビエトへの国家権力の移行を宣言する（四月テーゼ）が、この第1楽章はこのあたりのいきさつを示していると考えられる。

楽章のタイトルからも想像できる通り、全体的に「戦闘的」な空気を感じさせる楽章である。労働者から漂う泥や土の匂いや、革命への緊迫感が弦楽器で、砲弾の音や戦車の轟音を伴う行進が金管楽器や打楽器によってリズムカルな書法で描かれている。

弦楽器のユニゾンから和音が肉付けされていくニ短調の序奏(5/4拍子)からこの交響曲は始まる。これは第一のテーマ（メロディー）でもあり、民族的であり抒情的でもある。変拍子（曲の途中で拍子が変わること）のメロディーであるためリズムは捉えにくい。あまり意識せずに旋律に溢れる時代の香りのようなものを感じとるように聴くと良いと思う。第一のテーマはこの後にファゴットで焦燥感を伴った軽快さをもって現れる。その後の一旦の盛り上がり後に奏される（変ロ）長調の第二のテーマは、歓喜の雰囲気をもった英雄的なテーマである。この2つのテーマは交響曲全体（全楽章）を通して現れるテーマであるから覚えておきたい。

第一のテーマが短調の場合、第二のテーマが対比を持たせて長調となるのは古典的な技法なのであるが、第一のテーマが、泥臭くもがく労働者たちであるならば、弦楽器の和音の連なり（コラール）によって清々しく彩られ、歓喜のファンファーレにまで高まる第二のテーマは、さしずめそこに現れる革命家レーニンへの賛歌であるとみることもできる。（ショスタコーヴィチはこの交響曲を書いた直後に「この交響曲で私は、十月革命とその指導者レーニンのイメージを具象化しようとした」と語っている）

この両テーマは交響曲全体を貫くものであるために、この第1楽章の半分を使って印象的に描写されていて、書法や音響的な効果も極めて鮮やかで聴



き応えがある（ショスタコーヴィチのなかでも絶品の部類に入ると評されている）。

提示部・展開部・再現部とで構成されるソナタ形式であるこの曲の展開部はわかりやすく、最初に現れたファゴットの主題が調を変化させて明確に現れ、今までに提示された音楽的材料が矢継ぎ早に展開されて戦闘的高まりを形作っていく。途中には革命歌「同志よ、勇敢に歩調をそろえよう」（日本では「憎しみのるつぼ」と訳されている）も挿入され、展開の一役を買っている。曲の最後では序奏が（今度は金管セクションで）思い出されるように演奏され、二短調で始まった曲が二長調の弱奏で終わる。これが実は最終楽章のコーダを暗示している。ピッコロやフルートの高音が長く演奏されるタイミングが第2楽章へのつなぎ目である。

第2楽章 ラズリーフ Adagio

ラズリーフとは「氾濫」という意味もあるが、ペトログラードの北部にある湖の名前であり、曲名はこれに由来している。四月テゼで臨時政府に喧嘩を売ったレーニンであったが、臨時政府にドイツのスパイであるという疑惑を吹聴されたため仲間の支持を失い、デモを鎮圧されてしまう。臨時政府からの殺害を恐れたレーニンは変装してペトログラードから逃亡。ラズリーフ湖に潜伏して『国家と革命』を執筆しながら計画を練る

この場面を表したこの楽章は「潜伏」を表す底を這うような低い音で繰り返されるフレーズが曲全体を支配している。静かな湖畔での平和とは言えない潜伏活動の息遣いが表現されているとみることができる。この執拗に繰り返されるフレーズの中に時折第1楽章で提示された2つのテーマが不完全な断片で顔を覗かせているから聴き取ってみて欲しい。

このフレーズが繰り返される上で、同じ音が3回繰り返されて5度上に飛躍する旋律が現れる（最初はホルンで奏される）。フレーズの切れ目にトロンボーンとチューバで、また2回目は弦楽合奏で、演奏される抒情的なコラールは美しい聴かせどころである。

第1楽章に比べて劇的な盛り上がりもなく同じ表情が続く音楽であるが、綿々と続く音楽の中たゆたっていくフレーズには、レーニンがラズリーフで思索したことについて、ショスタコーヴィチの推測や印象が直感的に表現されているはずであるから、聴く側も思索に耽りつつ聴いてみてはどうだろうか。

ちなみに、曲中で、弦楽器のピッチカート（弦を指で弾く奏法）で演奏される「ミ♭-シ♭-ド」という割と脈絡なく現れる3音の連なりが簡単に聴き取れる。この3つの音も全楽章を通して出てくるのだが、これはヨシフ・ヴィサリオノーヴィチ・スターリン

（Ио́сиф Виссарио́нович Ста́лин）の名前の読み込みめであると言われる。名前の頭文字をとって、「И」は「イ」と発音されるから「E=ミ（曲ではミ♭）」、「В=シの♭」、「С=ド」、という3音である。実はラズリーフ湖へのレーニンの逃亡にはのちに大粛清を行い多くの反体制派を死刑にしたスターリンも協

力をしている。スターリンの行った「政治弾圧」は芸術にも及び、多くの音楽家も処刑され、ショスタコーヴィチもその影に怯えていた。

ショスタコーヴィチはこのような恣意的な名前の読み込みを多く行っている。代表的なのは「D-Es-C-H（レ-ミ♭-ド-シ）」という曲中へ自身の名前を刻印（D.SCH）であるがこの曲中では見られない。

第2楽章はpp（ピアノッシモ）でティンパニのロールが奏され、スターリンの3音がチェロとコントラバスによって奏されるあたりで終わり、途切れなく第3楽章へ移る。

第3楽章 アフローラ Allegro

1917年8月、ロシア共和国軍最高司令官コルネーロフのクーデターによるペトログラード進撃に対し、臨時政府はレーニン率いる左派のボリシェビキに支援を要請し、これを打ち負かすことに成功した。しかしそれによって一旦弱まったボリシェビキの勢いが再び活気づくことになる。10月には革命の機運が一気に高まり武装蜂起の宣言を採択し、前後して軍の各部隊も次々に臨時政府ではなくボリシェビキの指示に従うことを表明し、勝負はついたも同然であった。臨時政府部隊は崩壊していき、革命軍はペトログラードの印刷所、電信局、通信社などの要所を制圧。10月25日に「臨時政府は打倒された。国家権力はペトログラード労兵ソビエトの旗艦であり、ペトログラードのプロレタリアートと守備軍の先頭に立つ軍事革命委員会に移った」と宣言した。最後の臨時政府の閣僚が残る「冬宮」の占拠も同日の夜、防護巡洋艦「アフローラ」（オーロラの意味）の砲撃合図に始まったが、抵抗らしき抵抗はなく閣僚達は逮捕、ロシア臨時政府首相ケレンスキーは国外へ逃亡した。事の顛末はこのようにとんとん拍子に進んだのだが、当時の政府によってこの出来事は「激しい戦闘の末に制圧された」と実際よりかなり劇的に伝えられていたようである。

曲は速いテンポと快活なリズムを持ったテーマが現れ、揚々たるアフローラの進軍がイメージでき、戦艦ものの映画のBGMに使われても違和感のないような曲想である。最初はティンパニによる予告があった後で、曲のテーマが弦楽器のピッチカートで現れる。それがオーボエ、クラリネット、ファゴットに受け継がれ、徐々に金管楽器がプラスされ、音が厚くなっていく。一旦は静まり、弦楽器の不安を煽る伴奏のなかチューバによって第1楽章で現れた第二のテーマが出現し、革命の成功を確信していくかのように曲は最高潮へと向かう。ピークでは銅鑼が鳴り響き（アフローラの号砲か？）、ピアノッシモで始まったこの曲のテーマが全員合奏によって堂々と奏される。巡洋艦アフローラが今まさにすぐそこまで迫ってきているような遠近感を、強弱によるコントラストで表現したと言えるだろう。最後にはこの曲のテーマと、中間部でも出てきた第2の



テーマ（ファゴット、トロンボーン、チューバ、チェロ、コントラバスで奏される）が同時展開されて、騒乱の様相で第4楽章へ突入する。

第4楽章 人類の夜明け L'istesso tempo

十月革命の勝利として鳴り響くこの最終楽章は、突然霧が晴れたように晴れがましい勝利のテーマをホルンが凱旋のファンファーレのように演奏するところから始まる。このテーマは第1楽章で聴いた第二のテーマとフレーズの始まりが似ているため、そこから派生して作られたテーマであるだろう。弦楽器と管楽器によって彩られてこの楽章の第一部分が終了すると、今度は軽やかな祝祭のダンスを思わせる3拍子のテーマが現れる。このメロディーが展開する中で同じく第1楽章で聴いた第一のテーマもスムーズに、そして目立たずに挿入されている。最後は随分と長いクライマックス（交響曲5番の最終楽章のフィナーレによく似ている）を形成して、ffffで幕を閉じる。

凱旋のファンファーレ、祝祭のダンス、豪華なクライマックス。これだけ見ると、単に革命の成功を祝ったフィナーレのように一見されるが、果たしてそうなのであるかは聴いていて疑問が残る。

まず第2楽章で解説した「スターリンの3音」がこの最終楽章では執拗に、そしてかなり目立った形で何度も繰り返される。「スターリン、スターリン！スターリン！！」だんだんとこの3音は声高になり、交響曲を締め括る最後の和音を演奏する直前には全楽器をもって大合奏されるのである。スターリン時代の圧政と恐怖をショスタコーヴィチ自身が体験した後に完成したこの交響曲であるから、その時点から十月革命を振り返ったときに、この革命を単なる成功として評価

できなかったというようなことは、ショスタコーヴィチにとってありそうなことである。もしかしてこのフィナーレはレーニンの勝利なのではなく、スターリンの勝利を表したものであるだろうか。そのような思いで聴いてみると、この最終楽章はどうしても革命の成功一色で塗られているようには全く聴こえてこなくなる。目立つ部分では喜びが表現されてはいるものの、はっと思い出すように第一のテーマが悲痛さを持って演奏されたりするためどうしても喜びが表現しきれていない、不完全燃焼の感がある。また最後のクライマックスも豪華であるが、必要以上に（茶化したように）長い（「書かれたように演奏するのは恥ずかしい」とロストロポーヴィチは言った）。革命以前のペトログラードに巻き戻されたように第1楽章の戦闘シーンが再現される箇所もある。前述したように第5番交響曲のフィナーレの歓喜の表現がもし「強制された歓喜」であるならば、それに酷似したこの交響曲のフィナーレにも同じような「いわく」がついても不思議ではない（ショスタコーヴィチがこの交響曲を「レーニンの風刺」にするつもりだったという証言もある）。

実際のところショスタコーヴィチはこの最終楽章の創作に苦戦していたというから、単に作曲がうまくいかなかったと超楽観的に考えることもできなくもないが、これは単なる革命の勝利の凱歌であるのか？はたまた暗号化されたスターリンへの屈服の表現であるのか？はたまた他のものか？鑑賞後にどんな印象を抱くか楽しみに聴いてみてほしい。一体「人類の夜明け」とは何を意味しての命名であったのだろうか。

（前中 悠輔）

チラシを持ち帰らずとも、今後の演奏会情報が
スマホで確認できるようになりました！



演奏会の概要



演奏曲の試聴



チラシ画像



プロモーション動画



楽団からの
メッセージ



楽団のWebサイト
SNS

アクセスはこちらから！



スマホのカメラを起動し、こちらのQR
コードにカメラをかざしてください

Powered by



Orchid

※演奏中は携帯電話、スマートフォンの電源OFFのご協力をお願いしております。休憩中、演奏会終了後にご覧ください。

アンケートのお願い

本演奏会では新型コロナウイルス対策の観点から、アンケート用紙の配布・回収は行いません。

終了後に今回の演奏会の感想をお聞かせください。
右に記載している URL、もしくは QR コードから
アンケートフォームにアクセスしてご記入ください。

PC などから

bit.ly/3ng0Tqc

スマートフォンなどから



※演奏中は携帯電話、スマートフォンの電源 OFF のご協力をお願いしております。こちらは休憩中や演奏会終了後にご記入ください。

水星交響楽団

常任指揮者

齊藤 栄一

コンサートマスター

森 勇人

ファーストヴァイオリン

安藤 孝志

伊東 陽子

遠藤 颯

奥野 葵

奥野 大志

落合 友佳里

加藤 峻一

川原 ひかり

佐久間 達也

櫻田 雅信

滝澤 蘭

角田 拓也

西沢 洋

平山 奈菜子

◎森 勇人

米嶋 龍昌

セカンドヴァイオリン

織井 奈津乃

櫻田 泰斗

◎砂川 湧

高橋 熙

田村 奈津子

土屋 和隆

永井 翠

早川 智之

福島 宏章

前澤 郁弥

宮川 妙子

柳下 裕俊

ヴィオラ

有井 晶

網中 愉香

長田 玲子

小田中 里奈子

木曾 隆

木村 納

古宇田 凱

三上 さやか

◎山口 実

チェロ

大久保 雅子

金澤 直人

上竹原 修一

北岡 正英

◎鈴木 皇太郎

橋 温子

東郷 丞

中山 憲一

日吉 実緒

能岡 雅人

コントラバス

◎石附 鈴之介

刈田 淳司

谷田 晃朗

長屋 裕大

松岡 和男

宮本 貴幸

フルート

大山 司

齋藤 美唯

◎中澤 高師

本田 洋二

オーボエ

石井 英久

黒川 達郎

菅野 勇斗

寺田 吉太郎

◎野口秀樹

クラリネット

市村 広奈

清水 樹土

馬場園 真吾

◎藤原 誠明

前中 悠輔

ファゴット

伊藤 綾香

大村 美名

小田中 優介

◎富井 一夫

ホルン

伊集院 正宗

大高 直哉

大山 美佳

岡本 真哉

◎島 啓

清水 颯太

山崎 智哉

トランペット

浅田 健二

家田 恭介

◎岩瀬 世彦

金子 恭江

神山 優美

トロンボーン

石井 志歩

小林 威之

櫻井 統

◎佐藤 幸宏

チューバ

植松 隆治

パーカッション

奥山 千穂

岸 敦子

高良 佑佳

鈴木 日向子

芹澤 美津穂

高橋 淳

◎椿 康太郎

山本 勲

ピアノ

山形 リサ

ハープ

東森 真紀子

◎=パートリーダー

本演奏会でご指導いただいたトレーナーの先生方（敬称略）

長田 雅人、高山 健児、林 憲秀、古野 淳、前田 正彦、三橋 敦、柳澤 崇史

水星交響楽団運営委員会

運営委員長：植松 隆治

コンサートマスター：森 勇人

弦インスペクター：刈田 淳司、川俣 英男

木管インスペクター：横地 篤志

金管インスペクター：佐藤 幸宏

打楽器インスペクター：山本 勲

楽譜：伊集院 正宗、野口 秀樹、宮川 雅裕

ステージ・マネージャー：櫻井 統

会計：浅田 健二、黒川 夏実

運搬：刈田 淳司

広報・受付：市村 広奈、岡本 真哉、鈴木 海里、鈴木 牧、
土屋 和隆、東海林 拓人

プログラム制作：伊集院 正宗、伊東 陽子

チケット：清水 樹土、砂川 湧

チラシデザイン：水本 紗恵子

次回演奏会のご案内

水星交響楽団 第63回定期演奏会

指揮 井崎 正浩

2022年5月22日（日）12:30 開場 13:30 開演（予定）

すみだトリフォニーホール 大ホール

ストラヴィンスキー

バルトーク

リムスキー=コルサコフ

バレエ「プルチネルラ」組曲

バレエ「かかし王子」演奏会用組曲

交響組曲「シェヘラザード」